

保育者効力感と食事行動

岩 井 勇 児

保育者の仕事は、子どもの自我が育つのを助け、自立する力をつけることだと思う。そのためには、保育者自身の自我が成熟していることが必要だ。

しかし、学生の日常行動を観察し、エゴグラムを実施し、建学の精神に関する調査(2002)などを見ると、自我が未成熟の学生が多い。そして、保育者としての建前と日常行動が無関係になっているのが現状である。

この問題は、学生だけでなく、大学の教員でも見られることである。かつて、私は心理学において「研究と生活はばらばらでよいか」という問いを投げかけた(1983)。研究は、矛盾のない論理で進めるが、日常行動は矛盾に満ちている。だから、この問題は、単純には解決しない。それでも、日常行動とまったく無関係に、直輸入の研究をしていることを、私は批判したのだ。

私は高校生の時、教会の黒板に「岩井牧師は偽善者だ。説教していることと、日常生活の行いが矛盾している」と書いて、牧師である父を批判したことがある。自分が大人になってみると、この矛盾が分かかってきて、矛盾のなかで生きた父に、むしろ親近感を持った。建前と日常性の矛盾のなかに、私はキリスト教でいう罪を感じている。

学生たちの書くものをみると、こうした意味での罪意識はかけらほどもなく、自分の日常行動と無関係に気楽に、保育者は〇〇しなければいけません、と書いているのだ。そんなこといくら書いたって保育者として成長しない。それどころか、こうした建前で、子どもの心に響かない言葉がけをして、いい気になってしまう危険さもあるのだ。それなのに、それで平気なのは、自我が未成熟だからだ。

だから、私は保育者養成の第一歩として、自分たちの日常行動に目を向けさせ、自分の自我が未成熟で、幼稚であることに気づかせることに、力を入れてきた。自我が成熟しない限り、自分の評価ばかり気にして、子どもの面白さに気づくこと

はできないのだ。

そういう意図に基づいて、昨年度は保育者効力感と親からの自立について調査をした(2003)。それによると、学生たちは日常生活において、かなり親に依存して生活しており、家事労働の訓練を家庭において受けていない状態であった。また、保育者効力感と親からの自立の項目との関係を見たところ、家で食事を作ることがある者のほうが保育者効力感が高かった。

これらのことから、学生たちの日常生活において、もっとも基本になる食事行動について、その実態を調べて見ることにした。保育者になったら子どもたちに食事のしつけをする学生たちが、しつけができるような食事行動をしているのか、また、学生たちの保育者効力感と食事行動に、何らかの関係が見られるのかどうか、探索してみることにした。

方 法

(1) 調査用紙の作成

専攻科保育専攻の学生たちに相談して、以下のような項目を作成した。

①保育者効力感尺度

昨年度使用した尺度を使った。ただし、用語の不自然なところなど、若干の項目で手直した。

②食事行動の項目

- a. 平日、休日の食事のとりかた、選択肢
- b. 偏食について、選択肢
- c. 食事をめぐって、選択肢
- d. 食生活について、5段階評定
- e. 親から受けた食事のしつけ、自由記述
- f. 実習中の給食、選択肢、自由記述
- g. 食育について、選択肢、自由記述

調査票は末尾に添付したので参照されたい。

(2) 調査の実施

- ①調査対象：保育科2年生保育職論受講者、165

名。

②調査時期：2003年12月。

③実施：授業時に実施。無記名。教示は保育専攻学生高桑が担当。

結果

集計整理の都合上、一人暮らし、男子は除いた。集計対象は165名であった。特に断りがない場合、各表ともn=165である。なお、無回答は掲載していないから、パーセントの合計が100にならない場合もある。

(1) 保育者効力感について

保育者効力感の15項目についてについて、因子分析を行った。その結果、昨年度と違って、「気が通じる」「指導力感」「対応力感」「面白さ」の4因子に分かれた。因子ごとの項目の5段階評定を3段階にまとめた選択率を示したのが表1である。

この結果を見ると、「思う」の選択率は、「子どもがそばに寄ってきやすい」80%、「気が通じ合う」73%の2項目以外は、40%以下である。それに反して「？」の選択率が40%を超える項目が多く、「思わない」の選択率もかなりある。

因子別に見ると、子どもを指導する「指導力感」、いろいろな場面に臨機応変に対応する「対応力感」で、「思う」の選択率が低く「？」と「思わない」の選択率が高い。

これらは、保育者としての行動にあまり自信がないことを示している。昨年度の資料と比較すると、全項目の平均で、「？」は39%から43%に増え、逆に「思う」が2%、「思わない」が3%弱減っている。今回の対象のほうが、自己評価力が低く、自分で判断できなくなっている。

(2) 食事行動

①平日と休日の朝食夕食

朝食についてみると、「毎日食べる」は、平日で72%、休日で50%。「時間が決まっている」のは、平日で63%。休日で20%である。「個食」は平日57%、休日62%である。

夕食で、「時間が決まっている」のは平日休日ともに半数弱、「家族揃って」は、平日で24%、

表1 保育者効力感の因子分析と選択率

%

因子	項目	因子 負荷量	思わ ない	？	思う
気が通じる	12. 子どもが安心して、そばに寄ってきやすいほ うだと思ふ。	0.69	3	17	80
	13. 子どもとなんとなく、 気が通じ合うことが出 来ると思ふ。	0.52	3	24	73
	14. 子どもはたいてい、私 の言うことを聞いてく れると思ふ。	0.50	28	58	14
	11. 子どもの心の動きを、 読みとることができる と思ふ。	0.72	19	50	30
指導力感	2. 子どもの能力に応じた、 課題を出すことができ ると思ふ。	0.83	35	45	20
	1. 子どもに、わかりやす く指導することができ ると思ふ。	0.84	33	51	16
	10. 子どもの活動を考慮し、 適切な保育環境(人的、 物的)を整えることに十 分努力ができると思ふ。	0.77	25	41	35
	9. 1人1人の子どもに適 切な遊びの指導や援助 を行えると思ふ。	0.51	26	43	31
	8. クラス全体に目をむけ、 集団への配慮も十分に できると思ふ。	0.60	29	45	26
対応力感	4. どの年齢の担任になっ ても、うまくやってい けると思ふ。	0.55	35	45	21
	5. クラスにいじめがあっ たとしても、うまく対 処できると思ふ。	0.78	50	39	11
	6. 保護者に信頼を得るこ とができると思ふ。	0.66	21	61	18
	3. 保育プログラムが急に 変更された場合でも、 それにうまく対処でき ると思ふ。	0.63	50	34	16
	7. 子どもの状態が不安定 な時にも、適切な対応 ができると思ふ。	0.62	22	53	25
面白さ	15. 子どものすることは、 たとえ泣いたりけんか したりすることでも、 すべて面白いと思ふ。	0.87	22	39	39

休日でも41%である。

家族の「誰かと一緒に食べる」での一緒に食べる人は、朝食夕食ともに、母が一番多く、次がきよ

表 2 平日と休日の朝食夕食 %

朝食		平日	休日
毎日	1. 毎日食べる。	72	50
	2. ときどき食べる。	18	28
	3. ほとんど食べない。	10	21
時間	1. ほぼ決まっている。	63	21
	2. 不規則である	37	76
誰と	1. 家族揃って	3	9
	2. 家族の誰かと	39	23
	3. 1人で食べる	57	62
	4. その他	1	3
夕食		平日	休日
時間	1. ほぼ決まっている。	48	49
	2. 不規則である。	51	50
	無回答	1	1
誰と	1. 家族揃って	24	41
	2. 家族の誰かと	53	27
	3. 1人で食べる	18	13
	4. その他	4	19

うだい、父と一緒に少ない。

表 2 を見ると、食事時に家族が揃って団欒するような雰囲気は少なく、家族ばらばらに食事をしている様子が見られる。

②好き嫌いについて

好き嫌いについてまとめたのが、表 3 である。

好き嫌いが無い者は 42% だが、嫌いなものが出たら食べない・残すのは 59% いる。

表 3 好き嫌いについて

食べ物の好き嫌いは	%
1. ほとんどない	42
2. 少しはある	45
3. かなりあるほうだ。	13
嫌いなものが出たときには	%
1. 嫌いなものはないから、なんでも食べる	18
2. 嫌いなものでも、がまんして全部食べる	23
3. 少しだけ食べて残す。	35
4. まったく食べない。	24

③食事をめぐって

表 4 によると、家族揃って食事をするときでも、家族が向き合わず、テレビをみながら食事をするのが圧倒的に多い。

家で食事を作ることや手伝うことがほとんどないのが 56% もいる。後かたづけも、食器を流しに運ぶ程度が多い。

表 4 食事をめぐって

家族揃っての食事をするとき、テレビや会話は、どうですか。	%
1. テレビは見ないで、みんなが話ながら食べる人が多い。	11
2. テレビをみながら、話ながら、食べる人が多い。	81
3. テレビをみながら、あまり話さないで、食べる人が多い。	6
4. テレビは見ないし、話もあまりしないで、食べる人が多い。	1
休日などに、あなたは家で炊事をしますか。	%
1. 1人で家族の食事をつくることがある。	12
2. 親と一緒に食事をつくるが、1人でつくるとはしない。	31
3. 家で食事を作ることや手伝うことはほとんどない。	56
食後、後かたづけはしていますか。	%
1. 後かたづけは、よくする。	23
2. 食器類を流しに運ぶ程度のこととする。	64
3. 後かたづけは、ほとんどしたことない。	13

③食事行動について

食事行動について、10項目を5段階評定した。それを3段階にまとめて、「あてはまる」の多い順に並べたのが、表 5 である。

表 5 食事行動 %

項 目	×	?	○
2. 食事は、朝昼晩、一日 3 回食べる。	21	7	72
3. 食べる量は、いつも同じぐらいである。	15	15	70
5. 好き嫌いなくなんでも食べるほうである。	35	13	53
10 食事のマナーは、良いほうである。	10	38	52
1. 食事の時間は規則的なほうである。	33	15	52
8. 朝食、夕食は、家族一緒に食べる人が多い。	44	30	26
7. ファストフード類はあまり食べないほうである。	58	21	21
6. 栄養のバランスを考えて食事している。	52	30	19
4. 間食は、あまりしないほうである。	65	20	15
9. 食事中にテレビやラジオはつけないほうである。	88	2	10

注) ○あてはまる、×あてはまらない

これをみると、「3回食べる」「量が同じ」「好き嫌い」「マナー」「時間」などは、「あてはまる」が 50% 超えているが、それ以外は、「あてはまらない」ほうが多い。栄養に関すること、家族団欒

保育者効力感と食事行動

に関することは、大事にされていないのである。

⑤食事のしつけ

親からどんな食事のしつけを受けてきたか、自由記述させたものを、集計分類したものが、表6である。記述総数は672、1人当たり4である。

表6 食事のしつけ

分類項目	%
食事中の姿勢	22
箸の持ち方・使い方	20
食事時のエチケット	20
栄養・健康上の注意	11
茶碗・食器の持ち方	11
食べる順番・残さない	9
食後の片付け	2
食前・食後の挨拶	2
食事時間・回数	2
その他	1
総計	100

各項目の主な記述について、度数を無視して紹介しておこう。

a. 食事中の姿勢

- ・ひじをついて食べない。
- ・ひざを立てて食べない。
- ・姿勢を正しくして食べる。
- ・足をばたばたしない。

b. 箸の持ち方・使い方

- ・お箸の持ち方。
- ・はしの使い方のマナーを守る。
- ・はしとはしで食べ物を渡さない。
- ・迷いばしをしない。
- ・箸で食器を叩いて遊ばない。

c. 食事時のエチケット

- ・くちゃくちゃと音をたてて食べないようにする。
- ・口にものが入っているときは話さない。
- ・テレビを見ながら食べない。
- ・食事中、トイレに行かない。
- ・食事中は歌をうたわない。

d. 栄養・健康上の注意

- ・あまり間食をしない。
- ・よく噛んで食べる。
- ・バランスよく食べること。

- ・偏食しないようにする。

e. 茶碗・食器の持ち方

- ・お茶碗を持って食べる。
- ・左手で器を持つ、手をそえる。
- ・食器を鳴らさないように食べる。

f. 食べる順番・残さない

- ・三角食べをすること、主・副・汁物。
- ・少しずつ色々なおかずを食べる。
- ・残さずに食べる。

g. 食前・食後の挨拶

- ・「いただきます」「ごちそうさま」の挨拶をする。

h. 食事時間・回数

- ・一日三回しっかり食べる事。
- ・できるだけ時間を決めて食べること。

これらを見ると、比較的こまごまとした食事どきの行為について、注意されていることがわかる。

また、これらの記述をみていると、食べ物や洋風化してきた、といわれるなかで、箸、茶碗、食べる順番など、意外に和食のマナーが、家庭における食事のしつけとして、大きな割合を占めている。

(3) 実習中の給食について

①嫌いなものをどうしたか

実習園の給食を食べたか、給食に嫌いなものがあったときどうしたか、2つの質問に対する回答をまとめたのが、表7である。

表7 給食食べたか・嫌いなものは

園の給食(弁当)を食べたか	%
1. 子どもといっしょに食べた。	95
2. 食べなかった。(昼食:)	5
給食に嫌いなものがあったときどうしたか	%
a. がまんして、ほとんど食べた。	79
b. あらかじめ、量を減らしてもらって、食べた。	3
c. チーズ、牛乳パックなど、固形物は、そっと隠して食べなかった。	4
d. うまいこといって、子どもに食べてもらった。	1
e. 食べられない、といって残した。	2
f. その他	15

これをみると、ほとんどが給食を経験している。また、嫌いなものがあったとき、79%ががまんしてたべており、そのほかの行為は、わずかしか選

択されていない。

②嫌いなものを食べない子への対応

実習中に、嫌いなものを食べない子に対して、どのように対応したか、自由記述を分類したのが表 8 である。記述総数は 370、ひとりあたり 2 個余りである。

表 8 嫌いなものを食べない子への対応

分類項目	%
励ましの言葉がけ	44
量を減らす	18
一緒に食べる・食べて見せる	13
食べさせる・口に入れる	7
他のものと一緒に食べさせる	6
小さく切るなど	6
無理しない・見ている	3
他の子の食べるのを見せる	2
その他	1
計	100

これを見ると、いろいろな面からの「励ましの言葉がけ」がもっとも多く、「量を減らす」「一緒に食べる・食べてみせる」などが、続いている。「無理しない・見ている」はほんのわずかで、ともかく、食べさせようとしている。それぞれの項目に対する記述の例は、次のようである。

a. 励ましの言葉がけ

- ・「おいしいよ」と声を掛けた。
- ・「がんばって食べようね」と声をかけた。
- ・一口だけでも食べてみようか。
- ・「何でも食べると大きくなれるよ」と声をかける。
- ・栄養があることを伝えはげます。
- ・「ナスさんが〇〇君に食べてっていったよ」などと言葉がけをする。興味を持たせる。
- ・その子の好きなアンパンマンの話をしながら、気持ちを喜ばせて、一口でも食べられるようにする。
- ・一口でも食べたなら、ほめる。

b. 量を減らす

- ・食べる量を決めて、それだけは頑張るように励ます。
- ・全部食べさせるのではなく、一口でも食べるように促す。

c. 一緒に食べる・食べて見せる

- ・自分がその子の嫌いなものを「おいしい」と言って食べている姿を見せていく。
 - ・嫌なものを一緒に食べようと誘った。
- d. 食べさせる・口に入れる。
- ・「おいしいよ」とまず食べて見せてから一緒に食べてみようかと口に持っていった。
 - ・食べさせてあげる。
- e. 他のものと一緒に食べさせる
- ・他のものと一緒に食べさせてあげた。
 - ・好きなものに細かくして混ぜてあげる。
- f. 小さく切るなど
- ・小さく切り分けて「これだけたべてみようか」。
 - ・細く切って少しでも楽に食べられるようにする。
- g. 無理しない・見ている
- ・「一口だけ食べよう」と言葉がけ、あまり無理やり食べさせない。
 - ・気分がのらない時は無理強いしない。
- h. 他の子の食べるのを見せる
- ・他の子を見て、〇〇ちゃんも頑張って食べているから〇〇君も頑張ってみようという。
 - ・他の食べられる子に「おいしいよね？」など話しかけて食べてみようという気持ちにさせていく。

これを見ると、ともかく何とかして食べさせようとして、あれこれ試みている様子が分かる。

③食べるのが遅い子への対応

実習中に、食べるのが遅い子に対して、どのような対応をしたのか、自由記述を分類したのが、表 9 である。記述総数は 310、一人あたり 2 個弱である。

表 9 食べるのが遅い子

分類項目	%
励ましの言葉がけ	66
量を調節する	11
待つ・見守る	6
食べさせる・口に入れる	6
食べる動作・食べてみせる	4
時間を決める	4
早く食べた子を見せる	3
その他	1
計	100

これを見ると、「励ましの声をかける」が 3 分の 2 を占めている。それぞれの項目についての記

述例は、次のようである。

a. 励ましの言葉をかける

- ・「○○ちゃん、がんばれ、がんばれ」と言って少し急がせた。
- ・口の中にずっとごはんが入っていたので、「ごっくんしようか」と言葉がけした。
- ・「おかず（ごはん）が減ってないよ」と声をかけてその子が気がつけるようにする。
- ・遊んでしまい遅いなら、「後から遊ぼうね」「もういらないんだね」と食事に目が向けられるようにした。
- ・給食の人たちがお皿が返ってくるのを待ってるんだよと伝える。
- ・デザート先生がもらっちゃおうかなーと声をかけた。
- ・「今日も外で遊べなくなるよ、○○君の好きな砂場にいけなくなるよ。」と声を掛ける。
- ・「早く食べたら遊べるよ」と後のことに期待をもつように促した。

b. 量を調節する

- ・子どもが食べることのできる量にあらかじめ減らしておく。
- ・「これだけは食べようね。」と量を決めて食べさせる。
- ・残っているおかずを集めて食べやすくする（少なく見せる）。
- ・一度に口に運ぶ量を増やすように言った。

c. 待つ・見守る

- ・「ゆっくり食べればいいよ」と安心させてあげられるような言葉をかけ、側で見守る。
- ・あまり急がせないで、食べ終わるのを待った。
- ・ある程度待ってダメだったら、ごちそうさまをさせた。

d. 食べさせる・口に入れる

- ・口までスプーンを持って行って食べさせた。
- ・食べさせてあげる。

e. 食べる動作・食べてみせる

- ・噛み方を一緒に「もぐもぐ」と実習生も動かし、ごっくんした口の中をみせる。
- ・私自身がモリモリ食べる姿を示し、食べる意欲がもてるようにした。
- ・競争した。

f. 時間を決める

- ・時間指定、何時までに食べよう。
- ・時計の長い針が○のところまでに食べると目標を立てる。

g. 早く食べた子を見せる

- ・早く食べれた子をほめ、遅い子に影響を与える。
- ・他の子をほめて食べる意欲をもたせる。
- ・よく食べる子のとなり座るようにする。

これらを見ていると、「待つ・見守る」のはごくわずかで、なんとか早く食べさせようとしている様子が分かる。

なお、食育について質問したが、表10のように、まだあまり知られていないようである。

表10 食育について

項目	%
知っている	20
知らない、初めて聞く	79

(4) 指導力感と食事行動

保育者効力感は、「？」の選択率が高く、尺度として問題はあるが、因子分析の結果4因子が抽出された。これらと食事行動との関連を調べてみたところ、指導力感だけが、食事行動など関係がありそうだった。そこで、指導力感の因子得点が-0.5以下の低群45人と0.5以上の高群49人について、比較検討した。

表11は、偏食及び食事を作ることなどについて、両群を比較したものである。

これを見ると、昨年度の調査と同じように、指導力感の低群のほうが高群よりも、食事を作らない割合が高い。また、「好き嫌いのあるなし」「嫌いなものが出たとき」「後かたづけ」のいずれも、高群のほうが低群よりも望ましい方向である。

表12は、食事行動に関する10項目およびその合計について、平均値を高群と低群で比較したものである。

これを見ると、「一日3回食べる」「食事中にテレビ」以外の項目では、いずれも高群のほうが数値が高い。すでに見てきたように、5段階評定で、3以下の選択率が高い項目が多かったのだが、それでも、相対的に見れば、高群のほうが低群より

表 11 指導力感と食事作りなど %

食べ物の好き嫌いは	高群	低群
1. ほとんどない	47	38
2. 少しはある	45	47
3. かなりあるほうだ。	8	16
嫌いなものが出たときには		
1. 嫌いなものはないなんでも食べる	16	16
2. 嫌いなものがまんして食べる	35	20
3. 少しだけ食べて残す。	29	33
4. まったく食べない。	20	31
あなたは家で炊事をしますか。		
1. 1人で家族の食事をつくる	14	16
2. 親と一緒に食事をつくる	37	22
3. 食事を作らない、手伝はない	47	62
食後、後かたづけはしていますか。		
1. 後かたづけは、よくする。	27	22
2. 食器類を流しに運ぶ程度	65	64
3. 後かたづけは、ほとんどしない	8	13

表 12 指導力感と食事行動

食べ物の好き嫌いは	高群		低群	
	\bar{X}	SD	\bar{X}	SD
1. 時間は規則的なほう	3.4	1.5	3.1	1.5
2. 朝昼晩、一日3回食べる	3.8	1.5	3.9	1.4
3. 食べる量は、いつも同じ	4.1	0.9	3.4	1.3
4. 間食は、あまりしない	2.4	1.2	2.0	1.2
5. なんでも食べる	3.5	1.4	3.1	1.6
6. 栄養のバランスを考える	2.8	1.1	2.1	1.1
7. ファストフードを食べない	2.5	1.2	2.2	1.2
8. 家族一緒に食べる	3.0	1.1	2.6	1.3
9. 食事中にテレビやラジオ	1.5	1.1	1.4	1.2
10. マナーが良い	3.7	0.8	3.3	1.0
食事行動全体	30.7	6.8	27.1	7.4

も、食生活として望ましい方向になっている。

以上、2つの表から、指導力感と食事行動に関連があり、指導力感の高い方が、望ましい食事行動をしていることが分かる。

考 察

(1) 家庭で伝わるべきことが伝わらない

食事行動についての調査結果から見ると、家庭で一緒に生活することによって、親から子へ伝わってきたものが、伝わらなくなった、という感じがする。

第1に、家族揃って食事をして、家族が向き合っ

た夕食でも24%しかない。休日の夕食でも40%に過ぎない。それに対して、1人で食べるのが、平日の朝食で57%、夕食でも18%である。しかも、せっかく家族揃って食事をして、テレビをつけているのが80%である。これでは、食事のときに家族が向き合っ

て話し合う機会はないといえよう。第2に、「食事のしつけ」として、比較的こまごまとした食事ときの行為を注意されており、食事のしつけというイメージのなかに、道徳的あるいは倫理的なイメージはないようである。

たとえば、家族の席順、箸をつける順番、全員の食事が終わるまで席を離れない、など、食事行動をとおして、家庭や家族のまとまりを維持してきたようなしつけは、姿を消している。

また、「いただきます、ごちそうさま」は、学生たちの意見だと、挨拶であって、食物に対する感謝ではない。私の子どもの頃は、ご飯が食べられるのは、神様やお百姓さん（農家というよりはこういう言い方をしていた）のお陰だから、食物を作ってくれた人や神様に感謝するように、しつけられた。飽食の時代、食物に対する感謝のしつけはないようである。

したがって、食事が、人間としての生き方を伝える場になっていない気がする。もっとも、これは質問の仕方が、食事中の会話ではなく、しつけに限定されたからかもしれない。

第3に、家事労働としての食事の支度をしつけられていないことである。「1人で家族の食事を作る」のは13%、「家で食事を作ることや手伝うことはほとんどない」は56%である。表5からみると、「間食はする」「ファストフードをよく食べる」「栄養のバランスは考えない」ほうが多数派である。つまり、食事を作るために、頭や手足を働かせる訓練を家庭で受けていない者が多いのだ。

家庭は家族が一緒に暮らすことによって成り立つ。そのなかでも、もっとも心身共に一体感を味わうことのできるのが食事の場面である。それなのにこういう状態では、家庭における家族のコミュニケーションや家族の一体感は、どこで育つのだろうか。私は、保育者としての勘のよさは、家族と一緒に暮らすなかで、自然に育つものである、

と思っている。それだけに、この結果は、残念である。

(2) うそ・おどし・ごまかしの言葉がけ

「子どもはたいてい、私の言うことを聞いてくれると思う」は、14%しかない。

「食べ物の好き嫌いはある」のは58%である。嫌いなものは「少しだけ食べて残す・まったく食べない」のが59%である。そして、「実習中には、嫌いなものをがまんして食べた」は79%である。

つまり、学生の多くは、食べ物の嫌いなものがある、嫌いなものはふだんは残すほうで、実習中はがまんして食べる、のである。しかも、自分の言うことは聞いてくれるとは思っていないのだ。こうした学生が、食べ物の好き嫌いがあり、嫌いなものを食べない子どもに、どのように対応したのだろうか。

おそらく、学生たちは、「食べられない子がみんなと同じように食べたいなと思っている」ことなど想像していない。「大人になるまでに嫌いなものでも食べるようになることがある」などと信じていない。そして、「嫌いなものは頑張って食べさせるもの」と信じている。つまり、子どもは嫌いなものでも食べる力を備えている、と思ってやらないのだ。だから、その場をごまかしても、なんとか食べさせようとする。

表8によれば、「無理しない・見ている」のはわずか3%だけで、あとはなんとかして食べさせようとしている。それも、言葉がけだけによるものももっとも多い。

言葉がけについて、学生たちの記述を見ると、「保育者は、子どもの目線に立って、子どもを援助しなければいけません」などふだん唱えているお題目とは、ほど遠い感じがする。

教育心理学の授業で、子どもをしつけようと思ったら、まず、子どもの現状を認め、その子どもを受容するところから出発することだ、と伝えたことは、ほとんど残っていない。

たとえば、嫌いなものを食べられない子に、「おいしいよ」「頑張って食べようね」などというのは、子どもの主張、子どもの存在そのものを否定するものだ。自分を否定するもの言うことなど聞くはずがない。

「にんじんさんが、〇〇ちゃんに食べて欲しいと言っているよ」などは、うそだ。子ども同士の会話でこうした言葉がでてもおかしくないが、大人が言うと嘘になる。事実として、にんじんがそんなこと言うはずがないことは、子どもだってすぐに気がつく。

「何でも食べると大きくなるよ」「食べないと大きくなれないよ」は、嘘の脅しだ。身体が大きくなるならないは、遺伝子をはじめ、いろいろな要因が効いているのであって、1つの食物だけのせいではない。

アンパンマンの話をしながらか、気分転換させて食べさせるのは、ごまかしだ。食べ物を、食べ物の魅力ではない、他の魅力で食べさせていたら、その場は食べるかもしれないが、自分から食べる力は発達してこない。

食べさせようとしてほめる言葉には、ほめ言葉の裏にある大人の魂胆がありありと見えるから、ほめられたって、子どもはちっともうれしくない。

このように、学生の記述を1つひとつ検討していくと、子どもに対して、否定、うそ、おどし、ごまかしの言葉がけをしているのに過ぎない。

食べるのが遅い子への対応も、分類項目の内容は違うが、励ましの言葉がけは、ほとんど同じようなものであった。

(3) うそ・おどし・ごまかしの言葉がけが育てるもの

学生たちは、こうした言葉がけをどこで学習したのだろうか。おそらく、自分たちが子どもの頃、親や先生から言われてきたことが、身体にしみ込んでいて、それがおうむ返しに出てきたのだ。

嘘と脅しとごまかしで育てられた学生たちが、また嘘と脅しとごまかしで子どもを育てる、という悪循環なのである。

そうしてみると、幼稚園、保育園、小中学校、高校から大学に至るまでの先生たち言動、あるいは世間の親たちの子どもへの言葉がけを見ていると、案外、嘘と脅しとごまかしで、子どもたちを動かそう、としていることが多い気がする。

そして、嘘と脅しとごまかしを言われ続けた人間は、人間を信頼しなくなり、素直に人の言うこと聞かなくなるのだ。

かつて、愛知教育大学に勤めていたころの話を思い出す。青年心理学などの評価は、レポートによるが多かったが、期日までに提出しない者があると整理がつかなくて困った。そこで、レポートの提出日時を指定して、1日たりとも遅れたら受け付けず、不合格とする、と宣言して、それを実行したことがある。再試験制度がないから、不合格になると再履修になる厳しいものだ。

自分がルール違反で不合格になったのに、不合格者が泣きついてきたり、脅迫してきたり、指導教官を通して圧力をかけてきたりして、対応がたいへんだった。その多くは、私の宣言が単なる脅しにすぎず、本当に不合格になるとは思っていなかった、いきなり不合格にするなんて先生のやり方は陰険だなど、文句や悪口を並べるのであった。

私は、宣言して実行したのだから、陰険どころか公明正大だと、全部突っぱねた。こういう荒療治を一度やっておくと、次の年度から、学生たちは実によく言うことを聞いてくれた。

こうした経験から、この言葉がけの記述を読むと、学生たちは子どもたちに、大人の言うことは、嘘で、脅しで、ごまかしだから、信用できないと思わせて、大人の言うことを聞かない子どもを育てていると思う。しかも、そんな悪いことをやっている気持ちはひとかけらもなく、善意と正義に満ちているのだから、困ったものである。

真実味のない、その場しのぎの言葉がけは、目先の成果をあげることもあるが、長い目で見ると、子どもの心を傷つけ、子どもに大人に対する深い不信感を与えているのだ。

私は、愛知教育大学でも本学でも、学生たちに嘘や脅しやごまかしを言わなかった。言ったことはすべて実行してきた。そうすれば、学生たちも私の言うことを素直に聞いて、それに応えてくれた。

なお、結果を整理してみて、「対応しましたか」ではなく、「実習生としての対応で、子どもが食べるようになった事例があれば、書いて下さい」といった質問にすれば、もう少し面白い事例が出たかもしれない、と思った。

(4) 指導力感と食事行動

保育者効力感の若干の項目の表現を変えたのと、

調査対象が違ふことにより、昨年度は因子分析の結果2因子だったが、今年度は4因子になった。そのうち、指導力感だけが、表10、表11で見えてきたように、食事行動と関連があった。

指導力感が高いということは、子どもの指導に自信を持っていることであり、それは自我がそれだけ成熟していることにもつながる。

指導力感の高群と低群でもっとも差があったのは、「家で食事を作ることや手伝うことはほとんどない」であり、高群で47%、低群で62%だった。

このことについては、昨年度も指摘したが、家事労働のなかで、もっとも総合的能力を必要とする炊事の能力を、家庭においてつけられているほうが、指導力感が高いということは、注目してよい。指導力感が高いほうが、炊事をするを含めて、食事行動全般に望ましい方向である、という結果は、保育者の資質にとって、保育者の育った家庭が重要な役割を占めていることを示している。

ここでは、食事行動だけを取り上げたが、昨年度の調査等も含めて考えると、それは食事行動だけの問題ではなく、家庭において、家族と一緒に日常生活をするなかで、自然に自我が育ち、家庭をよりどころとして、安定した自分の生活をするができることを意味している。指導力感の背景にはそうした自我の問題があるのだ。

結 び

これまで、家庭において、女性が家事労働という下積みの仕事をして、家族を支え家庭の機能を支え、子どもが育ってきた。それが、女性が家庭から社会に進出して、その下積みの仕事の一部が家庭外に委託されだした。その大事な部門である子育ての役割を期待されるのが保育者である。

こうした保育者の養成に、保育者養成機関である学校は、それなりの役割は果たしている。しかし、学校で育てられる資質には、限界があると思う。短大レベルの学校教育では、矛盾しない一般論や建前としての知識を伝えることはできるが、矛盾した日常性のなかで生きる勘、感性、知恵などを育てることは、なかなか難しいからだ。そして、こうした勘、感性、知恵がないと、学校で学

保育者効力感と食事行動

んだ知識や技能を日常生活で活用できないのだ。

今回の調査を通してみると、日常の保育行動の基礎となる一番肝心な、保育者としての勤、感性、知恵などといわれる、保育者の心身を総合した子育ての力量は、やはり保育者が育った家庭の日常性のなかで、育てられるような気がしてならない。

しかし、学生たちの食事行動をみると、その家庭がそうした機能を失いつつあるような気がする。そうなると、保育者の資質は、一体どこで育つのであろうか。

付 記：調査の企画、実施、集計整理にあたって、専攻科保育専攻の2003年度学生高桑いずみ、松本都、2004年度学生渥美純一郎、加藤由佳、平野由莉、神野裕子、平山晶子、前木愛弓の協力を得た。記して感謝したい。

文 献

岩井勇児 1983 第1章概観 児童心理学の進歩 1983年版 金子書房 1-34。

岩井勇児 2002 建学の精神「愛をもって仕えよ」に関する学生の意識 名古屋柳城短期大学研究紀要, 24, 197-213。

岩井勇児 2003 保育者効力感と親からの自立 名古屋柳城短期大学研究紀要, 25, 157-170。

岩井勇児 2004 保育科・専攻科保育専攻における授業改善と修了論文指導 名古屋柳城短期大学研究紀要, 26, 177-189。

三木知子・桜井茂男 1998 保育専攻短大生の保育者効力感に及ぼす教育実習の影響 教育心理学研究, 46, 203-211。

— 資料 —

調査SSS03 2003年12月 2日調査実施 2年 AB CD 組 男・女 名古屋柳城短期大学専攻科保育専攻

この調査は、みなさんの日頃の食生活と食育についての考え方を、知るためのものです。また、保育専攻学生の研究の1つでもあります。回答には正しいとか誤りとかはありません。あなたが、思ったことをありのままに書いて下さい。選択肢のあるものは、数字や文字を選び○をつけて、文章を記述するところは、自由に書いてください。指示があつてから始めて下さい。

(1) 現在同居している家族は

- a. 核家族 (父、母、きょうだい、 計 人)
- b. 3 世代 (父、母、きょうだい、祖父、祖母、 計 人)
- c. 母子または父子家庭 (父・母 きょうだい 計 人)
- d. 一人暮らし

(2) あなたの平日の食事について

①朝食

- a. 朝食は 1. 毎日食べる。 2. ときどき食べる。 3. ほとんど食べない。
- b. 朝食の時間は 1. ほぼ決まっている。 2. 不規則である。
- c. 朝食は 1. 家族揃って食べるが多い。 2. 家族の誰かと食べるが多い。 3. 1人で食べるが多い。 4. その他

②朝食で一緒に食べるのが最も多い人はだれ。(複数回答可)

- 1. 父 2. 母 3. きょうだい 4. その他 ()

③夕食

- a. 夕食の時間は 1. ほぼ決まっている。 2. 不規則である。
- b. 夕食は 1. 家族揃って食べるが多い。 2. 家族の誰かと食べるが多い。 3. 1人で食べるが多い。 4. その他

④夕食で一緒に食べるのが最も多い人はだれ。(複数回答可)

- 1. 父 2. 母 3. きょうだい 4. その他 ()

(3) あなたの休日(土、日、祝)の食事について

①朝食

- a. 朝食は 1. いつも食べる。 2. ときどき食べる。 3. ほとんど食べない。
- b. 朝食の時間は 1. ほぼ決まっている。 2. 不規則である。
- c. 朝食は 1. 家族揃って食べるが多い。 2. 家族の誰かと食べるが多い。 3. 1人で食べるが多い。 4. その他

②夕食

- a. 夕食の時間は 1. ほぼ決まっている。 2. 不規則である。
- b. 夕食は 1. 家族揃って食べるが多い。 2. 家族の誰かと食べるが多い。 3. 1人で食べるが多い。 4. その他

(4) 偏食について

①食べ物の好き嫌いがありますか。

- 1. ほとんどない 2. 少しはある 3. かなりあるほうだ。

②嫌いなものが食卓に出てきたときにはどうしますか。

- 1. 嫌いなものはないから、なんでも食べる
- 2. 嫌いなものでも、がまんして全部食べる
- 3. 少しだけ食べて残す。
- 4. まったく食べない。

(5) 食事をめぐって

①家族揃っての食事をするとき、テレビや会話は、どうですか。

- 1. テレビは見ないで、みんなが話ながら食べるが多い。
- 2. テレビをみながら、話ながら、食べるが多い。
- 3. テレビをみながら、あまり話さないで、食べるが多い。
- 4. テレビは見ないし、話もあまりしないで、食べるが多い。

②休日などに、あなたは家で炊事をしますか。

- 1. 1人で家族の食事をつくることがある。
- 2. 親と一緒に食事をつくるが、1人でつくることはない。
- 3. 家で食事を作ることや手伝うことはほとんどない。

③食後、後かたづけはしていますか。

- 1. 後かたづけは、よくする。 2. 食器類を流しに運ぶ程度のことはする。 3. 後かたづけは、ほとんどしたことがない。

(6) 食生活について：下記事項は、あなたにあてはまりますか。

- あてはまる(5)、どちらかといえばあてはまる(4) どちらともいえない(3)、どちらかといえばあてはまらない(2) あてはまらない(1)
- 1. 食事の時間は規則的なほうである。 ()
 - 2. 食事は、朝昼晩、一日3回食べる。 ()
 - 3. 食べる量は、いつも同じぐらいである。 ()
 - 4. 間食は、あまりしないほうである。 ()
 - 5. 好き嫌いなくなんでも食べるほうである。 ()
 - 6. 栄養のバランスを考えて食事をしている。 ()
 - 7. ファストフード類はあまり食べないほうである。 ()
 - 8. 朝食、夕食は、家族一緒に食べるが多い。 ()
 - 9. 食事中にテレビやラジオはつけないほうである ()
 - 10. 食事のマナーは、良いほうである。 ()

(7) 食事のしつけ あなたは、基本的な生活習慣としての食事について、親からどんなことをしつけられてきましたか。

保育者効力感と食事行動

(8) 幼稚園、保育所の実習中の給食（弁当）について

①実習中に給食のとき、次のような子どもに対して、あなたはどうのように対応しましたか、書いて下さい。

好き嫌いが多く、嫌いなものを食べない子

食べるのが遅くて、食事の時間内に食べ終わらない子

②あなたは、園の給食（弁当）を食べましたか。

1. 子どもといっしょに食べた。
2. 食べなかった。(昼食：)

③給食に、あなたの嫌いなものがあったとき、どうしましたか。

あなたがしたこと、すべてに○をつけて、ください。

- a. がまんして、ほとんど食べた。
- b. あらかじめ、量を減らしてもらって、食べた。
- c. チーズ、牛乳パックなど、固形物は、そっと隠して食べなかった。
- d. うまいことって、子どもに食べてもらった。
- e. 食べられない、といって残した。
- f. その他（具体的に：)

調査終了後、記入漏れを点検してから、この調査の感想を書いて下さい

--

(9) 食育について

最近、知育、徳育、体育、食育などと、食育と言う言葉が使われています。

①食育という言葉を知っていますか。

1. 知っている。
2. 知らない、初めて聞く。

② 保育に関して考えると、「食育」とは、どんなことと思いますか。思いつくことを書いて下さい。

(10) 保育者として

下に、保育者について書いてあります。これを読んで、自分のことをどう思いますか、5段階で評定してください。

非常にそう思う(5)、ややそう思う(4)、どちらともいえない(3)、あまりそうは思わない(2)、ほとんどそう思わない(1)

1. 子どもに、わかりやすく指導することができると思う。 ()
2. 子どもの能力に応じた、課題を出すことができると思う。 ()
3. 保育プログラムが急に変更された場合でも、それにうまく対処できると思う。 ()
4. どの年齢の担任になっても、うまくやっていけると思う。 ()
5. クラスにいじめがあったとしても、うまく対処できると思う。()
6. 保護者に信頼を得ることができると思う。 ()
7. 子どもの状態が不安定な時にも、適切な対応ができると思う。()
8. クラス全体に目をむけ、集団への配慮も十分にできると思う。()
9. 1人1人の子どもに適切な遊びの指導や援助を行えると思う。()
10. 子どもの活動を考慮し、適切な保育環境(人的、物的)を整えることに十分努力ができると思う。 ()
11. 子どもの心の動きを、読みとることができると思う。 ()
12. 子どもが安心して、そばに寄ってきやすいほうだと思う。()
13. 子どもとなんとか、気が通じ合うことが出来ると思う。()
14. 子どもはたいてい、私の言うことを聞いてくれると思う。()
15. 子どものすることは、たとえ泣いたりけんかしたりすることでも、すべて面白いと思う。 ()

ご協力有り難うございました。

Pre-School-Teacher-Efficacy and Eating Habit

Iwai, Yuji*

昨年度行った「保育者効力感と親からの自立」に関する調査からの問題提起で、本年度は保育者効力感と食事行動に関する調査を行った。調査対象は保育科学生である。

保育者効力感を見ると、昨年度以上に「？」の回答が多く、学生の自信のなさがみられた。食事行動をみると、家族揃って食事をするのが少なく、個食がかなり見られた。また、家族揃った時でもその多くがテレビをつけており、食事時が家族が向かい合う場ではなくなっている。また、偏食もかなりみられた。

こうした学生が、実習中の給食で、嫌いなものを食べない子、遅い子に対して、言葉がけ等で何とかして食べさせようとしている。しかし、その言葉がけを検討すると、嘘・脅し・ごまかしの言葉がけが多く、幼児期から大人の言うことを信頼しない、言うことを聞かない子どもを育てている。

保育者効力感の因子分析をして、4因子得られたが、そのうち指導力感だけが、食事行動と関連があり、指導力感の低い方が家庭で炊事をする割合が低く、食事行動全般に望ましくない傾向がみられた。

食事行動の調査を通して、保育者としての子育ての力量は、家庭で形成されることを考察した。

キーワード：保育者効力感, 指導力感, 食事行動, 給食時の言葉がけ, 食事のしつけ